

## 印刷会社と地域活性化

小林 織恵 JAGAT 研究調査部

# 東京・千代田から 日本全国を活性化 「むらまち結び」の新しい挑戦

### 一般社団法人むらまち結び

自分たちが事業を営む地域に集うあらゆる「人・モノ・コト」を都市型の地域資源として活用、地域を一つのプラットフォームに見立て、「東京・千代田」で「地方」の活性化を試みる団体がある。千代田区商工業連合会会長の米倉伸三氏と、「貴方のむらまちの広報担当」として活動を始めた一般社団法人むらまち結びの山本久喜代表理事にお話を伺った。



年間を通して多くのイベントを開催。そこに住む人と訪れる人がともに盛り上がる千代田のまち

### 多面的な魅力を持つ千代田区

東京23区のほぼ中央に位置する千代田区は、1947(昭和22)年に「麹町区」と「神田区」が合併して誕生した。区名の「千代田」は、江戸城の別名「千代田城」に由来する。

この地域は江戸時代以降、江戸幕府の置かれる日本政治(行政)の中核、また將軍の居城「江戸城」を中心とした城下町として大きく進展、明治維新後も、江戸城は天皇の皇居に、周辺にあった旧大名屋敷跡は官庁街に生まれ変わるなど、首都機能を持つ「東京」の中心地として発展を続けた。

現在は、政府・省庁の集まる「霞が関・永田町」、金融や大手企業の本社の集積地「丸の内・大手町」、電気街とサ

ブカルチャー文化の街として世界に知られる「秋葉原」、古書店とスポーツ店の街「神保町・小川町」など、皇居を中心とするドーナツ状の多面的な魅力を持つ区として知られている。

### 各産業が連携できる仕組み作り

千代田における代表的な地場産業の一つは、日本有数の集積を誇る「印刷業」である。1964(昭和40)年には、千代田区の産業活性化の推進を目的に印刷業、製版業、製本業、軽印刷の組合4団体と、紙器業、繊維業の企業が参加する「千代田区工業団体連合会」を設立した。

しかしその後、千代田区内の一部が第二種特別工業地域に指定されると、

大型原動機付き機械の所有企業は区外への移転が余儀なくされ、時代の変化も影響し、関連地場産業の発展に陰りが見え始めた。「その時は強い危機感を感じていませんでしたが、何か手を打たなければならぬ、という漠然とした思いは生まれました」と、千代田区商工業連合会の米倉伸三会長は言う。

転機が訪れたのは、米倉氏が印刷工業組合の千代田支部長時代に参加した、区の懇談会だった。「行政との意見交換の場ということで、町会長や商店会連合会長、工団連の会長など、産業や職種垣根を越えた人が集合しました。そこで、昼夜間人口のギャップに由来する「働く人・通う人」と「住む人」の希薄化するつながりや、各産業間の連携の少なさなど、私たちが感じる千代田の課題を訴え、地域内商工業者や各種団体が協力・連携、協調しながら結果につなげる『ビジネス情報交換会』の開催を提案したのです」。

その後、しばらくして区から商工会議所との協働を条件にして予算配分を受けることとなり、「良い年、良い月、良い日」である平成11年11月11日に、第1回「ビジネス情報交換会」を開催した。

### 「千代田区商工業連合会」の誕生

「産業・業種の壁を越え関係作りができる『場』は整っても、協業して何かを生み出すことは難しく、回を重ねるごとに不満の声が聞こえてくるようになったんです。そこで、区内大学との産学官連携や中小企業診断士による参加企業のビジネスマッチング、大手広告代理店と提携した3年間限定の試みなど、実績を積み上げていった。

活動を続けるうちに、これまで知られていなかった千代田の隠れた地場産業「テナント業」を再発見、空きビル・空き店舗を活用して、ベンチャー企業や個人クリエイターを支援する、現在でいう「インキュベーションオフィス」の施設運営も開始した。

産業や業種、規模の大小はもちろん、産学官や企業、個人の枠を乗り越え、

協力し合える「場」作りが進み、活動が活発化していくに従い、区全体の活性化や観光まちづくりに取り組もうという機運が高まっていった。

2005年4月、地場産業の変革や環境変化に伴い、「千代田区工業団体連合会」を「千代田区商工業連合会」(以下、商工連)へと改編、製造業だけでなく多種多様な産業が参加できる団体として生まれ変わった。

### 複数の仕掛けを帯びるさくら祭り

商工連設立後は地域活性化事業に注力、各種イベントにも積極的に企画参加した。2006年から続く「千代田さくら祭り」は、その代表例の一つである。区内には、「靖国神社」や「千鳥ヶ淵緑道」など桜の名所が複数あり、開花時期には多くの観光客が訪れる。その各エリアや関連イベントを線でつなぎ、千代田区全体の「さくら祭り」としてブランディングしたのだ。

当初は、各方面から十分な協力が得られず持ち出しになったが、2年目以降は協力団体が増え、バス会社の協力を得て名所やイベント会場をつなぐ「無料シャトルバス」の運航も開始した。

「千代田さくら祭り」の特徴は、ただの季節イベントではないところ。区内に点在する「地域資源」に関連性を見出して新たな価値を付与、各スポット・イベント(点)に集まっていた観光客を広域へ周遊させると同時に、直接「さくら」とは関連のない地域や資源も活性化させる仕掛けを備えたイベントなのだ。

その他にも、2010年からは、「神田古本まつり」や「神保町ブックフェスティバル」など既にブランド化されていた区内複数のイベントを集約、ちよだ音楽連合会など新しい団体の活動なども取り込み、リブランディングした「千代田の秋まつり」を開催している。さらに、2011年には区内に集積する「カレー店」に着目、新たな魅力としてPRすることを目的に産学連携で「神田カレーグランプリ」を始動するなど、活動の幅を広げていった。



### 高感度な「千代田モノ」に仕掛ける

地域の課題解決に向け、業種や団体・個人に関係なく協働できる枠組みとネットワークを作ることで、新しいモノ・コトを創造し続ける商工連が、次に考えたのは「千代田」から「地方」を盛り上げるプロジェクトだった。

2013年4月、部会として「千代田ブランド委員会」を発足、基本方針の「人と地域をつなげる力」を具体化すべく、地域資源調査・解析を開始、2014年には千代田の地域資源を生かして地方の活性化につなげる「むらまち結びプロジェクト」を発足した。

2015年4月、1年間の準備期間を経て「一般社団法人むらまち結び」を組織、いよいよ活動を本格化させた。

「2つの取り組みを通して、千代田独自の地域資源を再発見できました。代表例は、ここに集まる『人』です」と、代表理事・山本久喜氏は話す。

毎日多くのビジネスパーソン、学生、観光客などが訪れる千代田区は、夜間人口4.7万人に対し、昼間人口は約17倍以上82万人、イベント時には最大300万人に膨れ上がるという。

「私たちは彼らの属性を分析し、情報などさまざまな事柄に高感度な『千代田モノ』と名付けました。むらまち結びでは、国内市町村が自地域をPRする際、『千代田モノ』に接触する機会を創出・提供、懸け橋となり地域の商工業・観光などの産業振興と活性化を支援したいと考えています」。

すでに区内イベントと連携した市町村のプロモーションをはじめ、地方のクラフトビールや食材を提供する会など、複数の企画が走り出している。

### 千代田から「地方」を盛り上げる

「むらまち結び」がユニークなのは、解決したいテーマや課題に応じて、千代田に集積する「人・モノ・コト」を効果的に組み合わせ、「東京」から「地方」を活性化させるシステムを構築した点である。これは一朝一夕にできることでは決してない。千代田区が持つ独自の資源と環境、千代田固有の課題を解決するために繰り返してきた大きささまざまな取り組み、そこから得られたネットワークや知見、経験の積み上げから生まれた「千代田ならではの」活動である。

さらに印刷会社の集積地でモノづくりの土壌があり、その上で新しいコト作りを行ってきた商工連の活動があったからこそ創出できた試みでもある。

地域を活性化することは、簡単なことではない。協働してくれる人を集め、地域資源を発掘し、磨きをかけてブランド化、地域内の理解・協力を促し、地域内外に情報を発信して人・モノ・コトの流れを作った結果を出すまでには、一定の時間がかかる。ただ、その一部の役割を、多くの経験やノウハウを持ち、新たな機会を創出できる地域外の協力者に求めてはどうだろう。「むらまち結び」の活動は、「千代田区」を「全国市町村」を盛り上げる一つのプラットフォームに見立てた、全く新しいカタチの地域活性化手法なのだ。

### 一般社団法人むらまち結び

- 代表理事=山本久喜(千代田商工業連合会千代田ブランド委員会委員長)
- 目的=千代田区内およびその周辺に存在するブランド資源を用いて、地方自治体および関連事業者の発展、活性化を図ることを目的とする。
- 設立=2015年4月1日
- 事業所=〒102-0072 東京都千代田区飯田橋4-7-4 飯田橋グランプラス2階
- Webサイト=www.muramachikunibi.tokyo



山本久喜代表理事(左)と米倉伸三氏